

## PROGRAM NOTE

### はじめに

「1820年頃、スペインのセヴィリア」。これがオペラ『カルメン』の舞台設定…、厳密に言えば、オリジナルのオペラ『カルメン』の冒頭に記されている舞台設定だ。

わざわざこんなことを書いたのは、普通私たちが慣れ親しんでいるはずの『カルメン』と今回の『カルメン』とは、様々な点が異なるから。幕が開くと…いやコンサートホールでの上演を前提としているので、その幕すらないのだが…、抽象化された装置や大道具の数々。しかもオペラの開始早々、こんな字幕が出るだろう「スペインの植民地だった19世紀のフィリピンの首都マニラ」。そうなのだ、この度の『カルメン』は19世紀末にフィリピンで起きた独立革命前夜のマニラに舞台設定を移し替えている。

それにしても、なぜあえて『カルメン』でフィリピンなのか？その根本的な疑問に答えてゆく前に、まずはこの作品が生まれた時代背景、そしてそのストーリーや音楽に隠された謎を幾つか追ってみることにしよう。

### 未曾有の繁栄、崩壊す

オペラ『カルメン』を作曲したのは、ジョルジュ・ビゼー(1838-75)。彼はわずか10歳でパリ音楽院に入学を果たしたり、19歳の折リフランスの

優秀な若手芸術家に与えられるローマ賞を受賞したりなど、若い頃から恵まれた音楽活動を展開していた。当時は、ビゼーのホームグラウンドだったフランスも、未曾有の好景気に沸いていた。首都パリでは中世の街並みが取り壊され、華やかな近代都市が誕生した。またそのようなパリを舞台に、フランスの国力を世界中に示すべく、万国博覧会が賑々しく催された。

ところが、そんな繁栄は突如終わりを告げる。原因は、1870年に勃発したフランス帝国 vs. プロイセン王国の戦争。この頃、東ドイツのベルリンを都とするプロイセン王国は、分裂状態にあったドイツに初の統一国家を誕生させようとしていた。それに対して危機感を募らせるようになったのがフランスであり、ついに両者の緊張は軍事衝突に至る。

結果は、フランスの大敗北に終わった。さらに翌71年、フランスの魂ともいえるパリ郊外のヴェルサイユ宮殿で、プロイセンを中心とするドイツ帝国の樹立宣言がおこなわれるという屈辱的状况をフランスの人々は味わわされた。しかも敗戦後の混乱の中、それまで裕福な市民=ブルジョアジーの搾取に喘いできた労働者たちが蜂起し、史上初の社会主義政権「パリ・コミュン」を樹立するなど、フランスは一時混迷状態に陥った。

### グランド・オペラ零落の中で

ビゼーもこうした状況の下、今まで自分が暮らしてきた世界があえなく崩壊してゆく様を、身をもって体験することとなる。特に作曲家としての彼にとって深刻だったのは、戦争を境に人々の嗜好が大きくがらりと変わってしまったことだった。例えばオペラの場合、戦争以前のフランスでは「グランド・オペラ」が大流行だった。これは大金持ちの市民の好みに合わせ、絢爛さや壮さを前面に押し出したもの。華やかなバレエのシーンが延々と続くのもお約束であって、男性客は札びらを切り、出演しているバレリーナを自分の愛人にする、という光景も日常茶飯事だった。だがこのようなグランド・オペラも、敗戦を境にぱたりと人気が途絶えてしまう。

いっぽう敗戦後のフランスのオペラ界において、切り札の一つとなったのがオペラ・コミックである。オペラ・コミックは読んで字の通り、元々は喜劇的な内容の台詞入り歌芝居だった。それがやがて19世紀に入ると、壮麗なレチタティーヴォを交え全編が音楽で固められたグランド・オペラ vs. 台詞を交えストーリーが進んでゆくオペラ・コミックという位置づけとなってゆく。客層も、脂ぎったブルジョアジーが目立つグランド・オペラとは対照的に、オペラ・コミックのそれには良家の子女の姿が多く見られた。

そんなオペラ・コミックの殿堂であったパリのオペラ・コミック座が、ビゼーに新作オペラの話を持ちかける。新たな時代のオペラのあり方を模索していたビゼーもこの話に乗る、それがやがて、プロ


スペール・メリメ(1803-70)のドキュメンタリー風の小説『カルメン』を題材にしたオペラの誕生へとつながった。

### オペラ・コミックの鮮烈さ

ところで今回の上演では、台詞の入ったオペラ・コミックの形式でビゼーが書いたバージョン、つまり原典版を復元した「アルコーア版」を用いる。

1875年、オペラ・コミック座において『カルメン』は初演されたものの、これは不評に終わった。原因としては、良家の子女も足を運ぶ劇場において密輸や殺人といった題材があまりに刺激的すぎた、ということらしい。そうこうしているうち、今度は作曲者であるビゼー本人が急死。彼の死後、親交のあったエルネスト・ギロー(1837-92)が台詞の部分に歌の入ったレチタティーヴォに直したバージョン、つまりグランド・オペラに近い改訂版が大ヒットしたため、オリジナルの版はすっかり忘れ去られてしまった。

ところが、台詞入りのオリジナルの形式のほうドラマ的に優れているという見方が、20世紀後半に入ると生まれてくる。例えば第1幕で喧嘩騒動を起こしたカルメンが、ドン・ホセに連行されようとするシーン。「しゃべるな!」というドン・ホセの命令に対し、カルメンは「しゃべらなければいいのね!」と切り替えし、歌を歌い始めた挙句、彼を悩殺してしまう。…このような場面は、台詞と音楽が交互に出現するオペラ・コミックの方法でなければ分かりづらく、ドラマとしても興奮をおぼえにくい。



そもそもオペラは、舞台芸術の中でもとりわけ非現実的要素が満載だ。現実の世界で歌いながら会話をする人間など存在しないところを、あえてそれを逆手にとり、歌を通じて登場人物の感情を炙り出す。となると、台詞と歌との間に生じるギャップが随所に現れるオペラ・コミックであれば、歌自体の中に秘められた登場人物の内面をより鮮烈に表現できるのではないか。その対象が、強烈な個性を具えたカルメンであればなおさらである。

### 漂白された?カルメン

ところがカルメンに具わった強力な個性は、ひたすら歌のみが出現する改訂版においては、台詞と歌が時として火花を散らすオペラ・コミック版に比べて漂白を免れない。そしてこの漂白されたカルメンこそが、長い間唯一のカルメン像としてまかり通ってきた。そうでなくても、ビゼーが考えていたオリジナルのカルメン像と、その後のオペラ『カルメン』受容の過程で第三者の手が加わったカルメン像の間には、幾つかの歴然とした違いがある。その一つこそ、カルメンの象徴であるかのように言われているバラの花に他ならない。オリジナルの『カルメン』では、彼女が手にしていた花はアカシアである。ちなみにアカシアの花言葉は「野生」、バラの花言葉は「情熱の恋」。

うがった見方かもしれないが、ここにもカルメンという個性の漂白が現れているとはいえないか。「情熱の恋」ならば、多くの人にとって受け入れやすい。だが「野生」となると?第3幕でカ

ルメンとその一味が実践しているように、岩山の中を命の危険を冒してさまよう野生的な人生のあり方を、文明化された近代人はどこまで受け入れられるのだろうか。このような事情に合わせ、「野生」は「情熱の恋」にすり替えられる。ヒロインを象徴する花は、アカシアからバラに変化する。結果、元々の「強烈すぎる」個性から、万人受けする「そこそこ強烈な」個性へと変えられたカルメンが作られ、彼女の人気は急上昇した。

### 日本からの発信

今回のプロダクションでは、そんな既成のカルメン像を揺るがし、ビゼーその人がオペラ『カルメン』において何を言いたかったのか、という点を明らかにしたかった。初演時の形を復元したアルコア版を用いたのもそのためである。

といっても、何でもかんでも初演の通りにするというわけではない。むしろその逆で、ビゼーのメッセージを21世紀の日本に住む人間としてどう蘇らせればよいかということを考えた末、独立革命前夜のマニラが舞台となった。

それにしてもなぜマニラなのか?かつてフィリピンを植民地にしていたのはスペインであって、そこには『カルメン』に登場するようなタバコ工場をはじめとするスペインの様々な習俗が入り込んでいた…という現実的な理由もないわけではない。

だが、今回のプロダクションを進めるに当たり、指揮の井上氏が自身のオペラ上演の際、常々思っていることが大きなヒントとなった。つまり日本でオペラを上演しようとする、オペラ発祥

の地であるヨーロッパの人間に似せた衣装や化粧に走り、それがかえって違和感や滑稽感を生み出してきた、という事実である。もちろんそれは、日本がオペラを受容してゆく中で必要な道のりではあったろうが、日本におけるオペラの歴史も100年以上経った今、舞台を作る側も見る側も、いつまでもこの状況に甘んじてよいのか。

けっしてそうではないだろう。もはや単なる真似事に満足するのではなく、日本から、そしてアジアから、世界に発信するオペラのプロダクションがあったってよいはずだ。だから、東洋系の顔立ちをした人々が数多く舞台上に登場する今回のカルメンの舞台設定は、必然的に東洋へと向かった。結果、スペインの影響を多々受けたフィリピンに落ち着いた。

### 民族・人種・階級…

他にもフィリピンを選んだ理由は色々ある。例えば、この地がスペインの植民地だったという歴史。そこで何が起こるかといえば、人種や文化の対立だ。しかも問題は征服者vs.被征服者という問題にとどまらない。例えば現地人でありながら、征服者に傭兵として雇われ、軍隊で働いている人々はどうか。彼らは何かあれば、自分たちの生活のためとはいえ、同胞に銃を向けなければならぬ立場に置かれているのだ。あるいは混血の問題。植民地支配は必ず混血児を生み出すといってよいが、彼らの置かれた立場は非常に微妙だ。征服する側からも征服される側からも白眼視され、マジョリティ=多くの人

間のように何らかの社会的拠り所を見つけることができないマイノリティ=少数派…。

このような民族や人種の問題は、「植民地」や「混血」という形でこそないが、実はオリジナルの『カルメン』にも描かれている。たとえばドン・ホセはスペイン北部のナヴァラの出身者、つまり南部の大都会セヴィリアにおいては「北から流れてきた田舎者」というレッテルを貼られた存在だ。まただからこそ、彼が人種的なアウトサイダーであるカルメンに惹かれた、と考えることもできる。あるいはセヴィリアに駐屯している軍隊も、元はといえば中央政府から派遣され、この街の治安に目を光らせる恐るべき組織である。

普段オペラ『カルメン』を見ていると、ついスペイン風の異国情緒に注意が行き、こうした社会問題は見過ごしにされやすい。だが混乱の時代の最中に書かれたこの作品には、実は当時の観客にとって非常に生々しいテーマが、はっきりと描き込まれていたのだ。

### 日本語を混ぜたわけ理由

では、こうした様々な対立を表現し、客席に理解してもらうにはどうすればよいか。その答えとして、あえて日本語の訳詩を作った上で、それをオリジナルのフランス語に混ぜるということをおこなった。日本語はフィリピンの現地人の言葉、フランス語は主にスペインの征服者の言葉、という設定となっている。(リアリズムを追求すれば、本当はタガログ語とスペイン語を用いなければならないが、オペラ『カルメン』自体がスペインの話の扱いながらフランス語で書かれている

という点から、この点はご了解いただきたい。)

もちろん現地の人間として、片言であろうと征服者の言葉が使えないわけではない。だが、例えば混血の人間に対しては、相手が現地人とは異なっている点をあえて炙り出し貶めるために、フランス語が用いられる場合だってあるだろう。逆に遠い国からやって来たスターに対しては…たとえ征服者の国の人間であろうとも…、彼がスターであるという尊敬や心酔ゆえに、征服者への憎しみを忘れてフランス語を使うことだって想定できる。

しかも今回は、国内外のソリスト、そして地元の合唱団が一堂に会する特別な公演だ。演じ手たちの間で言葉や文化や民族の違いが既に存在する状況の中で、あえてその差異を活かすことで、オペラ『カルメン』が内包する問題を浮き彫りにしたい。だからこそ、ドン・ホセは混血の伍長、闘牛士エスカミーリョはスペインからやって来た特別ゲストといった具合に、あえてオリジナルとは異なる人物設定をおこなった。彼らは、いったいどのような状況でどのような言葉を使い、周囲はそれにどのような反応を示すのだろうか？

### 踊り手の起用

もう一つ、今回のプロダクションで通常の『カルメン』の上演と明らかに異なる点が、踊り手の起用である。しかも彼らがスペインの民族衣装に身を包み、フラメンコを舞うならまだしも、そうではない。踊り手は、時に合唱の歌詞を視覚化したり…『カルメン』は合唱の活躍する場面が非常に多いオペラだが、今回はその合唱を

古代ギリシア劇のコロス合唱隊のように扱い、いわば観客と同じ目線からストーリーの進行に関わってゆくという位置づけにしてある…、音楽が象徴するテーマを身体で表現したりする役回りだ。

なお、後者に関してとりわけ重要となるのが、「運命の動機」。これは第1幕が始まる直前、それまでの賑やかな前奏曲に取って代わるかのように突然出現し、強烈な印象を残す。しかもそれは、第1幕でカルメンがドン・ホセにアカシアの花を投げつける場面、第3幕でカルメンの死が予告されるトランプ占いの場面、第4幕の大詰めでカルメンがドン・ホセに刺殺される場面等、ドラマの重要な場面になると必ず現れる。

この「運命の動機」に関する箇所は、今回は文字通り「運命」を象徴する踊り手を登場させることとした。それは、時に登場人物たちを操り、時に彼らの行動を見つめ、当作品の一大テーマが運命そのものであることを劇中の至る所で示唆する。何しろ19世紀のヨーロッパでは…たとえばプロイセンとの戦いに敗れる以前のフランスのように…、人間の知恵と力を用いれば明るい未来を切り開ける、といった右肩上がりの神話が大手を振っていた。それに対し真っ向から疑念を表明したのが、オペラ『カルメン』だったのだから。

### 革命と自由を問い直す

オペラ『カルメン』において、「運命」と並んで重要なテーマとなるのが「自由」である。これは第2幕の大詰めで合唱と独唱によって連呼さ

れるキーワードでもあるが、今回は革命を目論む秘密組織がこれを叫ぶという設定になっている点がポイント。そこでは、ビゼーを育んだフランスの歴史、つまり自由の理念を掲げた革命が18世紀末から幾度となく起きては失敗した、という事実を念頭に置いている。

フランス革命といえば、何といても1789年に勃発した大革命が頭に浮かぶ。自由を合言葉に、それまで特権階級の支配下に甘んじていた人々が立ち上がり、共和制が樹立され、王権が倒された。

だがやがて革命は泥沼化した。それまでは、支配階級なり王権なりといった共通の敵を倒すことで一致していた人々は、当の共通の敵が消滅するや否や、自らのエゴを剥き出しに血で血を洗う内輪争いを始めた。しかもそれではいけないというわけで、例えばナポレオンのように自分たちを導いてくれる強力な指導者を求めるもの、そうして出現した指導者がやがて権力を独り占めにして支配者の座に居座ると、その支配者に対する不満が高まって革命が起き…という出来事が繰り返された。

このような状況の中、革命とは何か、自由とは何かということに対する真剣な問い直しが、フランスでは時代を超えておこなわれてゆく。そしてそのただ中で生まれたオペラ『カルメン』は、「自由」に具わった魅力と危うさの両面を描き出す。

### 自由の危うさ


では、「自由」に具わった危うさとは何か。それは『カルメン』第2幕の最後、秘密組織に加わら

ざるをえなくなったドン・ホセの憧れの対象と重なり合う。

大都会で伍長として働いているドン・ホセだが、ここは彼にとってけっして住みやすい場所ではない。都会が特有にはらむ猥雑な空気、自然のかけらも感じられない空間に、彼は違和感を覚えている。ドン・ホセにとって憧れの地とは、遠く離れた故郷の村であり、そのような村とは往々にして、自然と人間の共生が図られている楽園といえる。

だが運命の定めによりドン・ホセの目の前に現れたカルメンは、自然そのものといえる野生的な存在だ。またそれゆえに、彼女は通常の価値観にそぐわず、それが強烈な魅力ともなっている。ただしカルメンと深く付き合えば付き合うほど、まさしく野生的な存在というにふさわしく、彼女が岩山や荒野といった厳しい自然の中に暮らすこともいとわぬ女性であることが分かってくるのもまた事実なのだ。それがドン・ホセにとっては、結局のところ重荷となっていった。彼は、自然を排除した大都会にも、剥き出しの自然の中にも暮らせなかった。彼が心から自由になれるのは、あくまでもそこそこの自然とそこそこの人工が調和する故郷の村だった。

だがそのような調和など、自然が牙を剥けばあっけなく崩壊してしまう。これを予想できなかったところに、ドン・ホセの悲劇があった。彼はカルメンという獐猛さを秘めた自然に惹かれ、そこに大都会では味わえない自由を求めようとしたが、彼女にとっての自由とは、それをはるかに超え出るものだったのである。



## 自然=運命

オペラ『カルメン』における2つの重要テーマ「自由」と「運命」。一見すると両者は、対立しあっているように思えるかもしれない。運命の束縛から逃れるべく奮闘し、その結果自由を手に入れる人生こそ素晴らしいとする近代ヨーロッパ的な価値観は世界を席卷し、右肩上がりの神話が崩れた現在においてすら、私たちの生き方を捉えている。

だがカルメンは、運命に抗う生き方をしない。「自然」と「運命」はカルメンにとって同じものであり、その価値観に生きるがゆえに、彼女は結局のところ社会のアウトサイダーであり続ける。カルメンを指して「恋に生き恋に死ぬ女」といった言い方が存在するが、実のところ彼女の恋とは、通常の世界で私たちが体験できるようなものではなく、自然や運命と直結しているような非日常の世界に通じているのだ。

では非日常の世界とは何だろう。つまるところそれは、ヨーロッパの哲学や思想で言われるように、エロス=愛と裏表をなすタナトス=死ではないか。第4幕の大詰めで、なぜカルメンがあえて死に急ぐような行為に出るのかといえ、それは彼女がみずからの抛って立つ自然=運命に完全に身を委ね、それによって究極の自由を得ようとしたからに他ならない。その姿勢を前にしては、ドン・ホセも、彼の恋敵であるエスカミーリヨも、はたまたミカエラも、究極の自由から疎外され続ける存在、あるいは運命のコマに留まり続けるのだ。

## 伝統という柔軟性

このように今回の『カルメン』では、運命の目から見た人間像というものを描くことに重きを置いた。運命の目からすれば、人間の自由意思などちっぽけなものであり、彼らはいわば操り人形のような存在にすぎないのではないか…。非常にシニカルな見方かもしれないが、人間存在に対する突き放した目線は、日本の古典芸能である狂言にも通じるところがある。狂言とは下剋上の時代に生まれたいわば人間の不条理を描く劇であり、さらにその不条理を笑いによって表現するところに、人間に対する徹底して醒めた眼差しがある。その狂言界の第一人者が、当プロダクションの演出に携わる。狂言独特の所作云々といった表面的な要素以上に、人間存在をどのように捉えるかというポイントに、演出の力点は置かれてゆくだろう。

…狂言にせよオペラにせよ、触れ直すたびに新たな発見があるのが「古典」や「名作」の魅力である。歴史に「もしも」は禁物だと言われるけれど、もしもオペラ『カルメン』の基となったメリメの小説『カルメン』しかこの世に存在しなければ、この話は、そしてカルメンというヒロインはここまで有名になっていただろうか。ビゼーのオペラ『カルメン』は、小説『カルメン』を踏まえながら、そこに汲めど尽きせぬ力を吹き入れた。その力に背中を押され、オペラ『カルメン』もまた、装いも新たに生まれ変わろうとしている。